

# 女の魚売り

小川未明

青空文庫



ある空の赤い、晩方のことであります。

海の方から、若い女が、かごの中にたくさんのだいを入れて、てんびん棒でかついで村の中へはいってきました。

「たいは、いりませんか。たいを買ってください。」と、若い女はいって歩きました。

この村に、一軒の金持ちが住んでいました。その家はすぎの木や、葉の色の黒ずんだ、かしの木などで取り囲まれていました。そして、その広い屋敷の周囲には、土手が築いてあって、その土手へは、だれも登れないように、とげのある、いろいろの木などが植えてありました。

若い女の魚売りは、その屋敷についている門から、しんとした内へ入ってゆきました。「たいを買ってください。」と、女はいいました。

この家は、金持ちでありながら、たいへん吝嗇であるということ、村では、みんな知らぬものがないくらいでした。

「どれ、たいを見せろ。」という声がすると、この家の主人が顔を出しました。

女の魚売りは、かごを下に置いて、たいを主人に見せました。林の間をとおして、

西にしの空そらの赤あかい色いろが見みられたのです。その空そらの色いろに負まけずに、たいの色いろは紅あかくあつたのでした。

「このたいは、新あたらしいか。」と、この家うちの主しゅじん人は聞ききました。

「新あたらしいにも、なんにも、もうすこし前まえまで、かごの中なかで、ぴんぴんはねていたのです。」と、女おんなは、主しゅじん人の顔かおを見み上げて答こたえました。

「なに、昨日きのう捕とれたのだろう。」と、主しゅじん人は冷あざわ笑らいながらいいました。すると、女おんなは、ほおをすこし赤あかくしながら、

「まだ、生いきています。」と答こたえました。

主しゅじん人は、じつと、かごの中なかのたいをながめていました。ほんとうに、たいのうろこは、一つ一つ、紅あかい貝かいがらのように、ぬれて光ひかっています。目は、真まつ黒くろに、なんでも見みえるように澄すんでいました。

「なにつ、生いきているつて。こんなに、じつとして動うごかないものが、生いきているはずがない。死しんでいるものを、生いきているなんてうそをつくな。」と、主しゅじん人はいいました。

「ほんとうに、海うみから、上あがったばかりなのですから、どうか買かってください。」

「こんな古ふるい魚さかなは、うんと安やすくまければ買かってやるが、それでなければいらぬ。」と、

主人しゅじんはいいました。

「まだ、これで生きています。海うみの水みづに入はいれば、泳およいではねます。どうかそういわないで買かつてください。」

「もし、この魚さかなが生いきていたら、みんな買かつてやる。もし、この魚さかなが死しんでいたら、みんなおれに、ただでくれるか。」と、主人しゅじんはいいました。

「ほんとうに、生いきていましたら、これをみんな買かつてくださいますか。」と、女おんなはたずねました。

「ああ、これだけのたいの金かねを払はらつてやる。そのかわり死しんでいたら、みんなこのたいをただでくれるか。」と、女おんなの魚さかな売うりに向むかって念ねんを押おしました。

「お金かねはいりません。みんなさしあげます。」と、女おんなは答こたえました。

主人しゅじんは、かごの中から、一ひぴきのたいをつまみあげて、宙ちゆうにぶらさげました。そのたいは、冷つめたく、大おきかつたが、じつとしてはねなかつた。

「これで、おまえは、生いきているというのか？」と、主人しゅじんは、女おんなを見て冷あざわ笑らいました。女おんなは、たいと、主人しゅじんとを見みくらべていました。

「さきほども申もうしたように、海うみの水みづに入いれると泳およぎます。どうか海うみまで私わたしといっしょにき

てください。」と、女は頼みました。

主人は、一里や、一里半歩いていつても、これだけのたいが、みんな自分のものになるのだと考えると、ゆくことをいとう気にはなれませんでした。

「ゆくとも、まあ、待つてくれ。」と、主人はいつて、支度をしました。そして、やがて、女は、かごをかついで先に立ち、主人は、その後からついて門を出て、まっすぐに海岸の方を指して道を急いだのです。

だんだん海に近づくと、風が、強く吹いていました。そして、松の木が、風に吹かれて鳴っている。そのあいまに、ド、ド、ド——という海鳴りの音がしていたのでした。

二人は、一つの砂山を上りますと、もう、目の前には、真つ青な海が、浮き上がっていました。そして波の音が、絶え間なく起こっています。海にも、夕日が赤々とさしっていました。白帆は、酒に酔ったように、ほんのりと色づいて、青い波の間に、見えたり消えたりしていました。陸に近いく所には、岩が重なり合っていて、その岩に打突かる波のしぶきが、霧となつて、夕暮れの空に細かく光つて舞い上がっています。女は、岩の近くにきて、肩からてんびん棒をはずして、かごを湿つた砂の上に下ろしました。

「さあ、たいを海に放すのだ。」と、金持ちはいいました。

「よく、見ていてください。」と、若い女はいいました。そして、かごの中のたいを、一ぴぎずつ白い手ですくうようにして、取り上げました。

たいは、いま、ふたたび故郷に帰ろうとします。女が、紅いたいを、波の間に落とし、たいは、いま、おどつて、はや、その姿を青黒い海の底に隠したのです。

「あれは波にさらわれたのだ。」と、金持ちは信じませんでした。

「さあ、今度は、よく見ていてください。」と、女はいつて、第二、第三、第四、というふうに、一ぴぎずつたいを海に放しました。

たいは喜んで、高く波の間におどり上がつて、しぶきを金持ちの顔にかけてゆくのでありました。

「どうぞごさいますか。」と、女は、すっかりたいを海に放してしまつたときに、いいました。

金持ちは、ぼんやりとして、見ていましたが、これは、夢ではないかと思つたのです。

「さあ、私に、お約束通り、たいのお金を払つてください。」と、女は、金持ちに向かつていいました。

すると、金持ちは、いちはやく、逃げ支度をして、

「だって、自分のものにならないものに、金を払う必要がない。」といいました。

女は、あきれた顔つきをしながら、金持ちを見て、

「生きていたら、お金をくださるお約束東ではありませんか。」といいました。

「そんな金は持たない。」と、金持ちはいい捨てて、そこから駈け出しました。そして、後も振り向かずに、どんどんと、あちらへ逃げていってしまいました。

女は、途方に暮れて、波打ちぎわに立ったまま泣いていました。そのとき、空の色は、しだいにうすれて、やがて、空も、海も、まったく、青黒くなってしまったのであります。

空の色が銀色に光って、生暖かな日のことでありました。年をとった女が、浜の方から、かごの中に、たくさんの方をいれて売りにまいりました。

「たらを買ってくださいませんか。」

女はこういって、村の中を歩きまわりました。たらは、冬の寒い日に捕れる魚であります。こんなに、暖かになってから、捕れることはありません。みんな、北の寒い、寒い、海の方にいってしまふからであります。

「いまごろたらが捕れるなんて、不思議なことですね。」  
 村の人たちは、こう語り合つて、だれも、その女の持つてきたたらを買おうというものはありませんでした。

「安く、まけておきますから、たらを買つてください。」と、女はいいました。

その女は、よく見ると、すがめでありました。人々は、その女の顔と、かごの中のたらとを見くらべて、買おうとするものはありませんでした。

女は、金持ちの家の門に入ってゆきました。

「たらを買つてくださいまし。」と、女はいいました。

「いらぬい。」と、金持ちは答えました。

「まけますから、買つてください。」と、女はいつた。

すると、金持ちは、戸口に出て、女の持つてきたたらを見ました。

「いま時分、たらがどうして捕れたらう。」と、金持ちは不思議がりました。

「今朝、たくさん上がったのです。」と、女は答えました。

「この生暖かな陽気じゃ、たらは腐つてしまふだらう。うんとまけてゆけば買つても

いい。」

「いくらにでもまけてゆきます。」と、女はいいました。

金持ちは、うんとまけさせて、みんなこのたらを買いました。そして、その晩は家じゅうのものが腹いっぱい食べたのであります。

すがめの女が、浜の方へ帰った時分から、南の風が吹きはじめました。あまり暖かなもので、遅咲きの花までが、一時に咲き、地の下からは、いろいろの草が、一夜の中に芽を出したのであります。だれでも、頭痛がするといわれないものがないほどでありました。

たらを腹いっぱい食べた金持ちの一家は、どうしたことか、その夜から髪の毛がばらばらと抜けて、それから幾日もたたないうちに、みんなぴかぴか光るはげ頭になってしまいました。

「たらにあたつたのだ。」と、みんなはいいました。

金持ちは、たらにあたつたことから、いつかたいを海に放して、金を払わないで逃げてきたことを思い出しました。一家のものが、生まれもつかない、あさましい姿になると、金持ちは、いままでした、いろいろのよくないことが後悔されました。そこで、金持ちは村に寺を建てました。自分は、ちようどはげ頭なので、その寺の坊さんになりました。身に黒い衣をまどつて、一日、御堂の中でお経を読んで暮らしました。

むら ひとびと  
 村の人々も、いつかは、その坊<sup>ぼう</sup>さんを信<sup>しん</sup>ずるようになりましたが、坊<sup>ぼう</sup>さんは、とうとう年<sup>とし</sup>をとって、その寺<sup>てら</sup>の中<sup>なか</sup>で死<sup>し</sup>んでしまったのです。

あと  
 後には、寺<sup>てら</sup>が残り<sup>のこ</sup>りました。寺<sup>てら</sup>のまわりには、すぎの木<sup>き</sup>がこんもりとしげっています。そして、いつまでも、晩<sup>ばん</sup>方<sup>がた</sup>の風<sup>かぜ</sup>に、さびしく吹<sup>ふ</sup>かれて、その黒<sup>くろ</sup>ずんだ葉<sup>は</sup>をゆすっています。桜<sup>さくら</sup>の花<sup>はな</sup>の咲<sup>さ</sup>くころには、この寺<sup>てら</sup>の境<sup>けい</sup>内<sup>だい</sup>にも桜<sup>さくら</sup>の花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>くのであります。

そら あか ばんがた  
 空<sup>そら</sup>の赤<sup>あか</sup>い晩<sup>ばん</sup>方<sup>がた</sup>、たいが捕<sup>と</sup>れて、この村<sup>むら</sup>へ売<sup>う</sup>りにきたときは、きつといいことがあると  
 むら ひとびと あらそ  
 いうので、村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>々は争<sup>あ</sup>って、そのたいを買<sup>か</sup>います。けれど、季<sup>き</sup>節<sup>せつ</sup>に遅<sup>お</sup>れたたらは、買<sup>か</sup>うと悪<sup>わる</sup>いことがあるというので、売<sup>う</sup>りにきても、けっして買<sup>か</sup>わないのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「女《おんな》の魚売《さかなう》り」となっています。

※初出時の表題は「女の魚売」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 女の魚売り

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>